

島前合宿では、福祉施設に訪問した。私たちは、シオンの園という施設に訪問し様々な体験をした。シオンの園という施設には、「シオン子どもの家」という放課後児童健全育成事業や地域子育て支援センター事業の「子育て支援センター・シオン」・障がい福祉事業である「ございな」就労継続支援事業 B 型・

「ハイツ・シオン」という共同生活援助事業・地域活動支援センター事業の「センター・ウェルカム」・老人デイサービスセンター「デイサービスセンター・シオン」・保育所「シオン保育園」など多くの施設がある。私たちは班に分かれて活動し、私がいた班は保育園に訪問した。保育園の職員の数は、全体で 19 名いて、運営していく上では足りているが預かれる子供の数を増やすためには、職員の数を増やす必要があるそうだ。この福祉施設がある島には待機児童が少しいるため解決するには職員の人数を増やす必要があるそうだ。この島には保育園が 2 つあるがそれでも待機児童ができてしまうそうだ。あまり大きな島ではないけれど待機児童がいるのだなと感じた。子供たちの親は、本土と変わらないような仕事をしているが、割合としては漁師が多いそうだ。散歩をするときには、海によって貝殻を拾ったり、海の近くならではの散歩をしているそうだ。またその時に話しかけてきたりしてきた人たちとしっかりとコミュニケーションをとらせることで、島民らしいコミュニケーション能力を身につけさせているそうだ。島には見たことない人がほぼいないためそのようなことができるそうだ。シオンの園にある他の施設でも、そのような見たことのない人があまりいないからこそできる支援を多く行えるため、そこが島のメリットではないかとおっしゃっていた。保育園としての課題は、保育園のつくり的に食育ができないこととおっしゃっていた。

私たちは中学校にも訪問しました、中学校では中学生たちに大学とはどのようなものなのかを教える授業をした。島には中学校までしかなく高校生は近くの島にあるため見かけることがあっても大学生は見かける機会がないため、実際に交流を試みようという趣旨の授業だった。中学生たちは大学に行くかはまだあまり考えていないが将来何をしたいかなどをしっかりとそれぞれ考えていた。高校に進学するとなると違う島の高校か本土に通わなければならないので、よりしっかりと考えるようになるのではないかと感じた。その中学校には、特別支援学級のようなクラスは無く、知的障害を持つ中学生も同じクラスで生活していた。

私たちは島前で生活する間海士町という島前の島の中の一つの島の、空き家を利用して生活をした。島で生活する間、島の人に貝やサザエご飯をごちそうになり、その島ならではの食事を体験することができた。また、海岸で釣りをしているときなども多くの島の方々が話しかけてくれたり、世話をしてくれたりとホスピタリティを感じることもできた。島には、I ターンで来ている人たちも多く

いて、このような島で子育てをしたかったとおっしゃっていた。海士町ではIターンを募集しているそうで、海士町に電話しヒアリングをし現地の職場の面接を受け、条件が合えば移住できるそうだ。実際にIターン・Uターンした人は「やりたいことを明確にして、目標をもって移住したら、きっと道が拓けると思っています。一生懸命行動していれば助けてくれる方も出てくると思います。また、実際に移住したら、地域の方への感謝の気持ちを大切にしてください、と言いたいです。」や「例えば海士町のことを、僕は「都会から遠く離れたド田舎の不便な島」なんてさらさら思っちゃいません。東京と比べるなんてそもそもナンセンスだ。「ここだからこそできること」がたくさんあるはずで、都会とは違う良さを守り、作っていけばいいのですから。それはどの田舎でも言えることですよね。地方へ移住するなら、そういう気概が必要なんじゃないかな。あと、海士に移住するなら、この島を経済的に自立させるために自分は何ができるだろう？って考えることが大事だと思います。地域を支える一員として、常にビジョンをつくる努力を怠らないようにすることです。田舎だからラクだろう、という甘えた姿勢ではダメだと思いますね。IターンもUターンも関係なく、みんなで一緒にこの島をより良くしていこうって考える移住者の方が増えたら、海士はますます良くなりますね」などと言っている。この言葉を聞いて、島への愛着を感じた。移住するにおいて課題もあるようで「移住直後の小学校入学式で、新入生がうちの子ひとりだけだったんです…。これは寂しかった。同年代の子どもがもっと増えたらいいな～とは思いますがね。あと、島に診療所しか無いのは移住前から気になっていました。最近ではドクターヘリの運航も始まって、緊急時のサポート体制は良くなっているとは思いますが、子どもにトラブルがおきやすい耳鼻科や眼科は隣の島まで行かなくてはならないので、この島にあつたらいいのになあ、と今も思います。」と語っている人もいます。また、私は25歳の若い女性が1人でIターンしているということに驚いた。その人はIターンの感想として「驚いたのは、人と人とのつながりの凄さです。ちげ活動や、地区の公民館で行う盆踊りなど、地域の結びつきの強さは新鮮に映りました。不満は特にはないですが…あえて言うならば、洋服やCDを買う店が無いことかな。仕事は、予想していた以上に楽しいですね！私の担当は、観光協会窓口での受付事務、バスガイド、観光船「あまんぼう」のガイド、歩いてのお散歩ガイド、ときどき民宿の手伝い…と多岐にわたりますが、海士町を訪れるお客様に海士の良さを紹介できることがとても楽しいです。そのために自分でも色々と勉強しなくてはなりません、学ぶこと自体も楽しいです。」と言っている。ちげ活動とは、地区の住民が一緒に行う清掃や草刈りなどのことである。また、「田舎は良くも悪くも人付き合いが濃いので、それが苦にならない人、いろんな人との触れ合いが好きな人だったら、きっと暮らしを楽しめるはずなので、移住へのチャレンジをおすすめします。

その場合は、やりたいことを明確にして行くと、得るものが多いと思います。私自身、これからのことを明確に決めているわけではなくて、ここに永住するかどうかはまだ分かりませんが、仮に本土へ戻ったとしても、この島で学んでいることはとても役に立つだろうと思っています。やさしいおじいちゃんおばあちゃんたちから色んなことを教えてもらっているし、交流が盛んな町なので、私自身のコミュニケーション能力も上がった気がしています。前向きなパワーがあふれている海士で、公私ともに様々な劇的体験をさせてもらっているのも、たいていのことには動じなくなったかも。私の人生の中で、得がたい時間を今ここで過ごしていると感じています。」とも言っている。やはり都会にはない様々な魅力があるのだなと感じた。私たちもこの島前合宿で、生活している中で人とのかわりとはとても多く感じました。この島のお祭りに参加した時も、仲間同士でチームを作ってきんにやもにやという踊りを踊る大会がとても盛り上がっていたし、多くの方々が飛び込み参加でその大会に参加した私たちと交流してくれた。東京からは夜行バスとフェリーを利用して半日以上かかるのでなかなかいける機会がないのでとても貴重な経験ができたとおもう。